小児科入院患者の病歴誌の年次的検討

Chronological review of clinical charts of in-patients
(In the case of pediatrics of a teaching hospital)

京都府立医科大学衛生学教室 (主任 額田 繁教授)

永 田 久 紀・石 崎 竜 雄

門 脇 一 郎・石 橋 睦 夫

Hisanori Nagata, Tatsuo Ishizaki,
Ichiro Kadowaki and Mutsuo Ishibashi

Department of Hygiene, Kyoto Prefectural University of Medicine
(Director: Prof. Akira Mukada)

Clinical charts of total 3,874 in-patients who were discharged from pediatrics of a teaching hospital in Kyoto, in 1940~41, 1950~51 and 1959~60 were reviewed.

Age and sex distributions and frequencies of various diseases observed on in-patients have remarkably changed in the past twenty years. And these changes on in-patients were found to be parallel to the corresponding changes on total death in Japan. This fact indicated that a group of in-patients was an unbiased representative of a population of severe patients.

Based on descriptions of the past history and the family history, changes of distribution of number of dead brother, distribution of family size and birth rank, frequency of breast child and distribution of source of hospital charge in the past twenty years were investigated. These changes seemed to represent the chronological changes of health and social conditions in Japan.

The results above mentioned shows that a review of clinical charts, especially a chronological review of them is very valuable as a source of health statistics.

著者等¹⁾ はさきに京都市内の3病院の小児科を昭和34, 35年に退院した患者の病歴誌を調査して, (i) 入院患者は重症患者集団の比較的に偏りの少ない標本で, その病歴誌の検討は疾病統計の基礎資料として充分に役立つこと, (ii) 当該疾病と真接に関係のない病歴誌の記載事項の中にも衛生統計の基礎資料として有益なものが少なくないことをあきらかにした。

この報告は小児科入院患者の病歴誌の衛生統計の基礎資料としての価値をさらに検討する目的で, 京都府立医大附属病院小児科を退院した患者の病歴誌を年次的に調査した結果である。対象は一医大附属病院に限られたが, 二, 三興味ある知見を得たので報告する。

調 査 方 法

調査対象は京都府立医大附属病院小児科を昭和15, 16年, 昭和25, 26年, 昭和34, 35年に退院した患者の中, 入院時の年齢が満15才未満のもの計3,874名である。

病歴誌より調査した項目は現症に (i) 直接関係する, 臨床診断名, 入院時年齢, 性, 入退院年月, 転帰, 在院日数, (ii) 当該疾病に直接関係のない, 麻疹・百日咳の

既往の有無, 乳児期栄養方法, 同胞数, 死亡同胞数, 出生順位, 入院治療費の支払方法である。

資料の分類・作表には I. C. T. 穿孔カードシステムを用い, 疾病分類は疾病, 傷害および死因の統計分類基本分類表²⁾に従った。

調 査 結 果

A 現症に直接関係する事項

1 小児科入院患者数並びにその性・年齢分布の年次推移

表1は退院患者数並びにその年齢分布の, 表2は男女比の年次推移である。

退院患者数は昭和15, 16年に比べ戦後は著しく減少している。小児科退院患者の全退院患者に対する比率は昭和34, 35年で約8.6%である。昭和15, 16年, 昭和25, 26年では全退院患者数が不明のため比率を求めることが出来なかったが, 全退院患者数は病床数等からみて現在より多いとは考えられない。従って小児科入院患者の占める比率は戦後大幅に減少したと考えられる。

年齢分布の年度間の相違は0.1%以下の危険率で有意

表 1 退院患者数並びにその年令分布の年次推移

年 度	患 者 数	0 才	1~4才	5~9才	10~14才	年度による相違の検定
昭和 15, 16 年	2,355	14.9%	49.6%	26.1%	9.4%	$\chi^2=110.2$
昭和 25, 26 年	622	14.6	54.2	21.9	9.3	$d.f.=6$
昭和 34, 35 年	897	24.2	33.3	26.7	15.8	$p<0.001$

表 2 男女比 (男/女) の年次推移

年 度	0 才		1~4才		5~9才		10~14才	
	患者数	男 女 比	患者数	男 女 比	患者数	男 女 比	患者数	男 女 比
昭和 15, 16 年	351	1.25	1,169	1.39	615	1.21	220	1.10
昭和 25, 26 年	91	1.28	337	1.44	136	1.89	58	1.76
昭和 34, 35 年	217	1.65	299	1.60	239	1.69	142	1.73
年度による相違の検定	$\chi^2=2.23$ $d.f.=2$ $p>0.3$		$\chi^2=0.98$ $d.f.=2$ $p>0.5$		$\chi^2=7.28$ $d.f.=2$ $0.05>p>0.02$		$\chi^2=4.76$ $d.f.=2$ $p>0.05$	

で、とくに昭和 34, 35 年に 0 才, 10~14 才の比率が増加し, 1~4 才の比率が減少していることが目立っている。

性別では男子の比率が次第に増加する傾向が認められるが, 男女比の年度間の相違は 5~9 才以外はいずれの

年令階級でも有意でない。

図 1 は入院患者の年令分布の年次推移を全国死亡の昭和 13 年³⁾, 昭和 25 年⁴⁾, 昭和 34 年⁵⁾ の年令分布の推移と比較した結果である。百分率の絶対値は入院患者と全国死亡でかなり異なっているが, 年令分布の年次推移の傾向は大体類似している。

2 入院患者の疾病分類の年次推移

表 3 は入院患者の疾病の種類別の年次推移である。

各年令階級を通じて, (i) 伝染病の比率が昭和 34, 35 年に激減していること, (ii) 新生物の比率が次第に増加していること, (iii) 診断名不明確の比率が昭和 34, 35 年に増加していることが認められる他, (iv) 0 才では呼吸器疾患の比率が昭和 25, 26 年以降減少し, 新生児の疾患の比率が昭和 34, 35 年で増加していること, (v) 5~14 才では循環器系疾患, 泌尿器系疾患の比率が昭和 34, 35 年で増加していることが認められる。

表 4 は入院患者の伝染病・寄生虫病の内訳の年次推移である。

結核の比率は昭和 25, 26 年で増加しているが, 昭和 34, 35 年で再び減少し, ビールスによる疾患の比率は昭和 34, 35 年に急増している。また, 腸管伝染病, その他の細菌性伝染病の比率は 0~4 才では段階的に減少し, 5~14 才では昭和 25, 26 年以降減少している。

図 2 は疾病の種類について, 図 3 は伝染病・寄生虫病の内訳について, 昭和 25, 26 年と昭和 34, 35 年との相

図 1 年令分布の年次推移
(入院患者と全国死亡の比較)

表 3 疾病分類の年次推移

疾 病 例 数	0才			1~4才			5~14才		
	昭. 15, 16	昭. 25, 26	昭. 34, 35	昭. 15, 16	昭. 25, 26	昭. 34, 35	昭. 15, 16	昭. 25, 26	昭. 34, 35
	351	91	217	1,169	337	229	835	194	381
伝 染 病 寄 生 虫 病	21.4%	22.0%	11.5%	42.5%	39.6%	19.1%	55.6%	47.4%	20.5%
新 生 児 の 疾 患	0.3	2.2	2.8	0.3	1.5	2.7	0.6	2.1	3.9
ア レ ル ギ ー 病	2.3	3.3	0.9	2.6	3.0	3.7	2.5	1.5	4.2
内 分 泌 系 統 疾 患	0.0	1.1	0.5	0.3	1.2	2.7	1.4	3.1	3.4
精 神 病, 人 格 異 常	0.3	0.0	1.4	0.3	0.0	0.3	0.6	2.1	2.4
神 經 系 感 覚 器	4.8	11.0	5.5	2.7	3.6	4.7	4.0	7.2	7.3
循 環 器 系	0.3	2.2	0.5	0.3	0.6	1.3	1.8	0.0	6.0
呼 吸 器 系	44.7	27.4	28.4	21.7	14.8	24.0	12.7	11.9	11.5
消 化 器 系	16.0	19.8	19.4	20.9	25.5	19.1	8.6	9.3	12.7
性 尿 器 系	1.1	0.0	0.5	2.1	3.6	4.7	4.0	6.7	11.5
皮 膚 疎 性 結 合 組 織	1.1	1.1	4.6	0.3	0.3	2.3	0.4	0.0	0.8
骨 ・ 運 動 器 官	0.3	0.0	0.5	0.2	0.9	1.1	1.4	1.5	2.1
先 天 奇 形	0.0	2.2	5.1	0.1	0.0	0.7	0.0	0.5	0.3
新 生 児 の 疾 患	4.3	3.3	11.5						
診 断 名 不 明 確	1.7	1.1	5.1	4.2	2.7	11.7	4.1	4.6	12.9
事 故 ・ 中 毒	1.4	3.3	1.8	1.5	2.7	2.0	2.3	2.1	0.5
年度による相違の検定	$\chi^2=59.93$ $d.f.=30$ $p<0.001$			$\chi^2=108.02$ $d.f.=28$ $p<0.001$			$\chi^2=188.50$ $d.f.=28$ $p<0.001$		

表 4 伝染病・寄生虫病の内訳の年次推移

疾 病 例 数	0~4才			5~14才		
	昭. 15, 16	昭. 25, 26	昭. 34, 35	昭. 15, 16	昭. 25, 26	昭. 34, 35
	572	154	82	464	92	78
結 核	7.9%	32.5%	12.2%	14.7%	31.5%	17.9%
梅 毒 ・ 性 病	2.1	0.6	0.0	0.4	1.1	0.0
腸 管 伝 染 病	38.1	22.7	12.2	31.7	14.1	16.7
その他の細菌性伝染病	32.0	25.3	13.4	46.1	29.3	30.8
スピロヘータによる疾患	0.7	1.3	0.0	0.0	1.1	0.0
(除 梅 毒)						
ビールスによる疾患	18.4	14.3	59.8	5.2	7.6	28.2
そ の 他 の 伝 染 病	0.5	0.6	0.0	0.9	4.3	0.0
寄 生 虫 病	0.3	2.7	2.4	1.0	11.0	6.4
年度による相違の検定	$\chi^2=148.21$ $d.f.=14$ $p<0.001$			$\chi^2=97.62$ $d.f.=14$ $p<0.001$		

違を, 入院患者と全国死亡と比較した結果である。昭和 15, 16 年の結果は全国死亡の疾病分類の方法が現在のものと異なっていたので除外した。疾病の種類, 伝染病・寄生虫病の内訳ともに年次推移の傾向は, いずれの年令階級でも, 両者でかなりよく一致している。

3 致死率の年次推移

表 5 は年令別の, 表 6 は疾病別の致死率の年次推移である。

致死率は昭和 34, 35 年で著しく低下し, 昭和 25, 26 年以前に比べて 0 才では約 1/5, 1~4 才では約 1/4, 5~

図 2 疾病分類の年次推移（入院患者と全国死亡との比較）

図 3 伝染病・寄生虫病の内訳の年次推移（入院患者と全国死亡の比較）

14才では約1/3となっている。疾病別でも例数の少ない二、三の疾患を除くと、新生物以外のすべての疾患で著しい致死率の低下が認められる。

表7は事故・中毒死を除いた人口1万対の全口死亡率と、この調査で得た致死率とから、死亡率/致死率の比を年次的に求めた結果である。この比は入院患者と同じ程度の重症患者の人口中における頻度を示すと考えることができる。比の値は0才では昭和25, 26年で半減しているが昭和34, 35年では再び増加している。1才以上では昭和25, 26年に激減し、昭和34, 35年にはほとんど変わっていない。このことは昭和15, 16年頃に入院の対象となったような重症疾患は公衆衛生の進歩によって著しく減少していること、昭和25, 26年以降では入院の対象となる疾病がかなり変化してきていることを示している。要するに少なくとも小児科の領域では治療医学の進歩による致死率の減少と、公衆衛生の進歩による重症疾患の減少がともに死亡率の減少に大きな役割を果しているといえる。

4 在院日数の年次推移

表8は在院日数の分布の年次推移である。全体的には在院日数30日以上、とくに90日以上在院日数の長いものの比率が次第に増加してきている傾向が認められ

表 5 年令別致死率の年次推移

年 令	昭. 15, 16		昭. 25, 26		昭. 34, 35		年度による相違の検定
	例 数	致死率	例 数	致死率	例 数	致死率	
0 才	351	28.8%	91	30.8%	217	6.5%	$x^2=42.66$ $d.f.=2$ $p<0.001$
1~4 才	1,169	14.3	337	14.0	299	3.7	$x^2=24.33$ $d.f.=2$ $p<0.001$
5~14 才	835	9.0	194	8.8	381	3.1	$x^2=12.64$ $d.f.=2$ $p<0.001$
計	2,355	14.6	622	14.8	897	4.1	$x^2=69.68$ $d.f.=2$ $p<0.001$

表 6 疾病別致死率の年次推移

疾 病	昭. 15, 16		昭. 25, 26		昭. 34, 35		年度による相違の検定
	例 数	致死率	例 数	致死率	例 数	致死率	
伝 染 病 寄 生 虫 病	1,036	13.6%	246	18.7%	160	3.8%	$x^2=18.02$ $d.f.=2$ $p<0.001$
新 生 児	9	22.2	11	45.5	29	44.8	$x^2=0.73$ $d.f.=2$ $p>0.5$
アレルギー・物質代謝	59	3.4	16	12.5	29	0.0	$x^2=1.74$ $d.f.=2$ $p>0.3$
内 分 泌 系・栄 養	16	25.0	11	36.4	22	4.5	$x^2=3.39$ $d.f.=2$ $p>0.1$
血 液・造 血 器	10	10.0	4	0.0	13	0.0	$x^2=0.03$ $d.f.=2$ $p>0.5$
精 神 病・人 格 異 常	82	47.6	36	30.6	54	1.9	$x^2=31.82$ $d.f.=2$ $p<0.001$
神 経 系	19	15.8	4	25.0	28	7.1	$x^2=0.27$ $d.f.=2$ $p>0.5$
循 環 器 系	520	13.7	98	9.2	178	3.4	$x^2=13.62$ $d.f.=2$ $p<0.01$
呼 吸 器 系	372	13.7	122	6.5	147	2.0	$x^2=16.48$ $d.f.=2$ $p<0.001$
消 化 器 系	61	6.6	25	4.0	59	0.0	$x^2=2.12$ $d.f.=2$ $p>0.3$
性 尿 器 系	10	30.0	2	0.0	20	0.0	$x^2=4.62$ $d.f.=2$ $p>0.1$
皮 膚・疎 性 結 合 組 織	15	0.0	6	16.7	12	0.0	$x^2=0.47$ $d.f.=2$ $p>0.5$
骨 ・ 運 動 器	1	0.0	3	0.0	14	7.1	$x^2=0.00$ $d.f.=2$ $p>0.5$
先 天 奇 形	15	46.7	3	66.7	25	12.0	$x^2=6.01$ $d.f.=2$ $p<0.05$
新 生 児 の 疾 患	89	13.5	19	5.3	95	1.1	$x^2=9.36$ $d.f.=2$ $p<0.01$
診 断 名 不 明 確	41	7.3	16	6.3	12	0.0	$x^2=0.06$ $d.f.=2$ $p>0.5$
事 故・中 毒							

表 7 全国死亡率 (人口 1 万対) と致死率との
比の年次推移

年 令	0 才	1~4 才	5~14 才
昭. 15, 16	4,046.9	1,290.9	390.0
昭. 25, 26	2,000.6	595.0	158.0
昭. 34, 35	4,595.4	459.5	151.6

る。

転帰別, 年令別, 疾病別に在院日数の年次推移をみて, 最も特徴的なことは, 治癒軽快例では在院日数 10 日未満のものの比率が増加しているのに反し, 死亡中止例では在院日数の短いものの比率が減少していることである。また, 特定の疾患の治癒軽快例のみについてみると, 在院日数にほとんど年次的変化が認められないことも注目値する。

小児科入院患者の在院日数に影響する因子は多種多様と考えられるが, 疾病の種類, 重症度, 治療の進歩に伴う疾病の経過の変遷, 後述する医療保険の普及による入院治療費の支払方法の変遷等が在院日数の年次的変化に大きな影響を及ぼしていることは否定できない。

B 既往歴・家族歴等に関する事項

1 麻疹・百日咳の年令別既罹患者率の年次推移

表 9 は麻疹, 表 10 は百日咳の年令別既罹患者率の年次推移である。

麻疹では第 1 子の場合には 3 才以下の, 第 2 子以上の場合には 1 才以下の既罹患者率が昭和 34, 35 年で低下している。これは近年における同胞数の減少とも関係があると思われるが, 一面一般家庭の医学知識の向上によって, 幼若者の麻疹の予防に努力がはらわれた結果と考えられる。

表 8 在院日数の年次推移

		年 度	例 数	中央値	在 院 日 数					年度による 相違の検定
					0～9日	10～19日	20～29日	30～89日	90日～	
全 体		昭. 15, 16	2,355	13.8日	36.1%	36.8%	14.5%	10.9%	1.7%	$x^2=64.53$
		昭. 25, 26	622	14.0	38.1	29.0	12.1	15.7	4.5	$d.f.=8$
		昭. 34, 35	897	15.0	34.9	30.4	12.8	17.1	4.8	$p<0.001$
転 帰	治癒・ 軽快	昭. 15, 16	1,715	15.5	26.0	43.1	17.0	12.1	1.8	$x^2=59.80$
		昭. 25, 26	458	14.9	32.1	35.6	12.0	15.7	4.6	$d.f.=8$
		昭. 34, 35	722	14.9	34.3	31.7	13.7	16.2	4.1	$p<0.001$
	死亡・ 中止	昭. 15, 16	640	7.9	63.1	20.0	7.8	7.7	1.4	$x^2=63.41$
		昭. 25, 26	164	9.1	54.9	12.8	12.2	15.8	4.3	$d.f.=8$
		昭. 34, 35	175	15.1	37.2	25.1	9.1	20.6	8.0	$p<0.001$
年 令	0才	昭. 15, 16	351	10.0	49.6	32.2	10.2	7.4	0.6	$x^2=22.83$
		昭. 25, 26	91	8.4	59.3	19.8	5.5	12.1	3.3	$d.f.=8$
		昭. 34, 35	217	13.7	38.7	30.0	14.3	13.8	3.2	$p<0.01$
	1 ～ 4才	昭. 15, 16	1,169	12.9	38.1	39.7	12.3	8.3	1.6	$x^2=43.54$
		昭. 25, 26	337	13.5	38.6	32.0	12.8	14.2	2.4	$d.f.=8$
		昭. 34, 35	299	10.4	48.5	28.4	6.4	11.7	5.0	$p<0.001$
	5 ～ 14才	昭. 15, 16	835	16.4	27.7	34.7	19.3	16.0	2.3	$x^2=30.48$
		昭. 25, 26	194	17.5	27.3	29.9	13.9	20.1	8.8	$d.f.=8$
		昭. 34, 35	381	18.6	20.0	32.3	17.1	23.1	5.5	$p<0.001$
主 な 疾 病 (治癒・ 軽快)	肺炎・ 気管支 炎・炎	昭. 15, 16	225	14.9	24.0	52.4	16.4	6.7	0.5	$x^2=11.79$
		昭. 25, 26	42	12.8	38.1	40.5	4.8	14.3	2.3	$d.f.=8$
		昭. 34, 35	77	13.1	37.6	39.0	11.7	11.7	0.0	$p>0.1$
	胃腸炎・ 大腸炎 ・炎	昭. 15, 16	271	12.7	36.9	46.8	9.6	6.3	0.4	$x^2=9.22$
		昭. 25, 26	99	10.4	47.5	40.4	9.1	2.0	1.0	$d.f.=8$
		昭. 34, 35	102	9.4	52.9	34.3	7.9	4.9	0.0	$p>0.3$

百日咳では第1子、第2子以上のいずれの場合にも10才以下で既罹患者率が昭和34、35年で減少している。麻疹で4才以上の既罹患者率に全く年次的変化が認められなかったのに反し、百日咳で年長者にいたるまで既罹患者率の低下が認められたのはあきらかに予防接種の効果と考えることができる。

2 同胞数、出生順位、有死亡同胞率の年次推移

表11は同胞数、表12は出生順位の分布の年次推移を3才以下のものについて調査した結果である。

昭和34、35年におけるひとりっ子の比率、第1子の比率の急増と、同胞数4人以上のものの比率、第5子以上のものの比率の激減は近年における家族の大きさの縮小、同胞数減少の傾向をよく反映している。

表13は同胞中に死亡者のあるものの比率（有死亡同

胞率）の年次推移を3才以下のものについて調査した結果である。

同胞数の少ない場合、多い場合ともに有死亡同胞率は昭和34、35年で激減し、近年における死亡、とくに乳幼児死亡の減少を如実に示している。

3 その他の調査事項

表14は乳児期における母乳栄養の比率の年次推移を3才以下のものについて調査した結果である。

例数の少ない第5子以上の場合を除くと、第1子の場合にも、第2～第4子の場合にも母乳栄養の比率は昭和34、35年で減少している。この結果は近年における乳児の栄養方法の変革を示唆している。

表15は入院治療費の支払方法の年次推移で、最近における医療保険の普及を明確に示している。なお昭和

表 9 年令別麻疹既罹患者率の年次推移

I) 第1子

年 令	昭. 15, 16		昭. 25, 26		昭. 34, 35		年度による相違の検定 ($d \cdot f = 2$)	
	例 数	既罹患者率	例 数	既罹患者率	例 数	既罹患者率		
0~1才	213	8.5%	47	8.5%	136	3.7%	$\chi^2=2.36$	$p>0.3$
2~3	183	32.8	56	23.2	59	18.6	$\chi^2=4.32$	$p>0.1$
4~5	145	53.8	28	53.6	55	54.5	$\chi^2=0.00$	$p>0.9$
6~10	150	84.7	35	85.7	81	85.2	$\chi^2=0.00$	$p>0.9$
11~	43	95.3	19	94.7	38	92.1	$\chi^2=0.02$	$p>0.9$

II) 第2子以上

年 令 年 度	昭. 15, 16		昭. 25, 26		昭. 34, 35		年度による相違の検定 ($d \cdot f = 2$)	
	例 数	既罹患者率	例 数	既罹患者率	例 数	既罹患者率		
0~1才	378	20.1%	123	11.7%	112	9.8%	$\chi^2=7.73$	$p<0.05$
2~3	330	46.1	103	37.9	65	36.9	$\chi^2=2.76$	$p>0.2$
4~5	236	66.1	56	67.9	53	67.9	$\chi^2=0.02$	$p>0.9$
6~10	269	87.4	60	85.0	122	82.0	$\chi^2=1.57$	$p>0.3$
11~	105	90.5	21	85.7	63	98.4	$\chi^2=3.31$	$p>0.1$

表 10 年令別百日咳既罹患者率の年次推移

I) 第1子

年 令	昭. 15, 16		昭. 25, 26		昭. 34, 35		年度による相違の検定 ($d \cdot f = 2$)	
	例 数	既罹患者率	例 数	既罹患者率	例 数	既罹患者率		
0~1才	211	7.6%	46	10.9%	132	2.3%	$\chi^2=4.48$	$p>0.1$
2~3	179	15.6	55	23.6	59	8.5	$\chi^2=3.94$	$p>0.1$
4~5	146	35.6	28	39.3	54	16.7	$\chi^2=6.35$	$p<0.05$
6~10	145	61.4	35	60.0	78	39.7	$\chi^2=8.95$	$p<0.02$
11~	42	50.0	20	65.0	38	60.5	$\chi^2=0.88$	$p>0.5$

II) 第2子以上

年 令	昭. 15, 16		昭. 25, 26		昭. 34, 35		年度による相違の検定 ($d \cdot f = 2$)	
	例 数	既罹患者率	例 数	既罹患者率	例 数	既罹患者率		
0~1才	377	8.8%	121	12.4%	133	2.7%	$\chi^2=6.13$	$p<0.05$
2~3	331	25.4	99	24.2	65	15.4	$\chi^2=2.47$	$p>0.2$
4~5	234	47.0	57	38.6	52	13.5	$\chi^2=18.62$	$p<0.001$
6~10	266	52.6	60	55.0	119	46.2	$\chi^2=1.40$	$p>0.3$
11	120	52.5	21	61.9	63	47.6	$\chi^2=0.79$	$p>0.5$

34、35 年には京都市に国民健康保険が実施されていなかったもので、現在では医療保険の占める割合がさらに大きくなっていると考えられる。

考 察

このような入院治療費の支払方法の変革が入院患者の疾病の種類、重症度、在院日数等に影響を及ぼすことも

1) 入院患者の年齢分布、疾病の種類、伝染病・寄生虫病の内訳等の年次推移の傾向は全国死亡のそれと比較

表 11 同胞数の分布の年次推移
(3才以上のものについて)

年 度	同 胞 数 例 数	1 人 (%)	2~3人 (%)	4人~ (%)	年度による 相違の検定
昭和15, 16年	1,192	27.7	44.5	27.8	$x^2=105.1$
昭和25, 26年	358	22.9	49.4	27.7	$d.f.=4$
昭和34, 35年	410	46.8	46.4	6.8	$p<0.001$

註：同胞数には本人を含む

表 12 出生順位の分布の年次推移
(3才以下のものについて)

年 度	出 生 順 位 例 数	第1子 (%)	第2~4子 (%)	第5子 ~ (%)	年度による 相違の検定
昭和15, 16年	1,190	35.8	49.8	14.4	$x^2=75.6$
昭和25, 26年	355	31.6	54.9	13.5	$d.f.=4$
昭和34, 35年	409	51.8	47.2	1.0	$p<0.001$

表 13 有死亡同胞率の年次推移
(3才以下の者について)

年 度 同 胞 数	昭. 15, 16		昭. 25, 26		昭. 34, 35		年度による相違の検定 ($d.f.=2$)
	例 数	有死亡同胞率	例 数	有死亡同胞率	例 数	有死亡同胞率	
2~3人	527	20.1%	177	23.7%	190	10.5%	$x^2=10.99$ $p<0.01$
4人以上	331	56.5	99	53.5	28	25.0	$x^2=9.09$ $p<0.02$

註：同胞数には死亡同胞を含む

表 14 母乳栄養の比率の年次推移
(3才以下の者について)

年 度 出 生 順 位	昭. 15, 16		昭. 25, 26		昭. 34, 35		年度による相違の検定 ($d.f.=2$)
	例 数	母乳栄養者の 比 率	例 数	母乳栄養者の 比 率	例 数	母乳栄養者の 比 率	
第 1 子	344	73.8%	102	73.5%	177	37.3%	$x^2=70.59$ $p<0.001$
第 2~4 子	476	74.6	172	78.5	153	47.7	$x^2=45.29$ $p<0.001$
第5子以上	138	74.6	47	59.6	4	75.0	$x^2=3.12$ $p>0.2$
計	958	74.3	321	74.1	334	42.5	$x^2=120.38$ $p<0.001$

表 15 入院治療費の支払方法の年次推移

年 度	昭. 15, 16	昭. 25, 26	昭. 34, 35
例 数	2,355	621	836
支 払 方 法			
全 額 自 費	97.79%	62.48%	29.07%
医 療 保 険	0.08	31.56	67.23
学 用 患 者	0.38	0.97	0.00
医 療 扶 助	0.05	4.18	2.03
そ の 他	1.70	0.81	1.67
年 度 に よ る 相 違 の 検 定	$x^2=1835.12$ $d.f.=8$ $p<0.001$		

的によく一致していた。この事実は病歴誌を資料として入院患者の疾病像の年次推移を検討することが、一般重症患者集団の疾病像の年次推移を推定する有力な方法の一つであることを示している。この調査で、小児科入院

患者の疾病の種類、転帰、在院日数等に極めて顕著な年次的変化が認められたが、これは単に入院患者の疾病像の変遷を示すのみでなく、小児の重症患者集団全体の過去20年間の疾病像の変遷をかなりよく反映しているものと考えられる。

2) 病歴誌から麻疹・百日咳の既往歴の有無を調査して、年令別の既罹患者率の年次推移を検討した結果、幼若者の麻疹予防に努力のはらわれている傾向や百日咳の予防接種の効果を認めることができた。また、病歴誌の死亡同胞についての記載から、有死亡同胞率の年次推移を検討した結果は、最近における死亡、とくに乳幼児死亡の減少をよく反映していた。これらの事実は、病歴誌の記載事項の中には一般衛生状態の年次推移の検討に役立つ資料が豊富に含まれていることを示している。

3) 病歴誌の記載から同胞数、出生順位の分布の年次推移を検討した結果は家族の大きさの最近における縮小

の傾向を明確に示した。また、病歴誌の乳児期栄養方法についての記載から母乳栄養の比率の年次推移を調査した結果は、乳児の栄養方法の最近における変革を示唆した。また、入院治療費の支払方法の年次推移は、最近における医療保険の普及状況をあきらかにした。これらの事実病歴誌の調査が、患者の生活環境、社会的背景等公衆衛生の基礎となる資料の提供にも役立つことを示している。

要するに入院患者の病歴誌は単に入院患者の疾病についての知識を与えるばかりでなく、重症患者集団全体について、さらには一般衛生状態、生活環境、社会的背景等について有益な情報を提供するもので、とくに病歴誌の年次的検討はうるところが大きいといえる。

入院患者の病歴誌は専門の医師によって記入され信頼度もたかく、保存も比較的によく行なわれていて入手しやすい資料である。衛生統計の資料として大いに利用すべきである。ただ病歴誌の当該疾病に直接関係のない事項の中には記載がもれていたり、不完全のものがみられるが、一層記載が完全正確になることがのぞまれる。

む す び

京都府立医大附属病院小児科を昭和15, 16年, 昭和25, 26年, 昭和34, 35年に退院した患者の中、入院時の年齢が満15才未満の者計3,874名の病歴誌を対象と

して、患者の性・年齢分布、疾病の種類、致死率、在院日数、麻疹・百日咳の年齢別既罹患者率、同胞数・出生順位の分布、有死亡同胞率、母乳栄養の比率、入院治療費の支払方法の分布の年次推移を調査し、その結果にもとづいて病歴誌の衛生統計の資料としての価値を検討した。

入院患者の病歴誌は単に入院患者の疾病についての知識を与えるばかりでなく、重症患者集団全体について、さらには一般衛生状態、生活環境、社会的背景等について有益な情報を提供するもので、とくに病歴誌の年次的検討はうるところが大きいといえる。

本論文の一部は第18回日本公衆衛生学会(広島)で発表した。

額田教授の御校閲を感謝し、資料の提供に御援助くださいました京都府立医大小児科の諸先生に感謝致します

文 献

- 1) 永田久紀他: 日本衛生学雑誌
- 2) 厚生省大臣官房統計調査部: 疾病、傷害および死因の統計分類提要 昭和33年版, 第1, 第2巻
- 3) 内閣統計局: 昭和13年死因統計 昭14
- 4) 厚生省大臣官房統計調査部編: 昭和25年人口動態統計 昭27
- 5) 厚生省大臣官房統計調査部編: 昭和34年人口動態統計 昭36

(受付1963年6月10日)